

童謡への誤断

東 道人

野口雨情の作品のいくつかについて、近年、大人の物語を創作し、それが恰も雨情の作風基盤におよぶ実話のように世上ひろく流布されている。それらを少しく考えてみたいと思う。

七つの子

雨情は明治四〇年（一九〇七）一・三月にかけて『朝花夜花』第一・二編を出版。その中で「山鳥」と題する童謡短章を詠む。

鳥なぜ啼く／鳥は山に／

可愛い七つの子があれば

これは名作「七つの子」の原詩である。そして大正十年七月『金の船』に「七つの子」を発表した。

ところで、読売新聞・二〇〇一年十一月四日付に『私の父（雨情の長男）雅夫は数え年七歳の時、雨情とともに木を植えたことがある。「なぜ木を植えるか、知っているか」と尋ねる雨情に、父は首をかしげると、雨情は「雅夫が十歳になれば、この木も十歳になる。木も人間と同じく生きているのだ」と、自然を愛する心を語った。ちょうどそこに群れからはぐれた一羽のガラス云々。「ガラスがカアアと鳴くのは、かわいいかわい

と鳴いているんだよ」雨情はそう言ったという」とある。

雨情は明治三十七年（一九〇四）に高塩ひろと結婚、大正四年（一九一五）五月に離婚している。

文中「雅夫は数え年七歳」とあるが、雅夫の誕生は明治三十九年八月である。原詩が詠まれた明治四〇年雅夫は数え年「二歳」であり、『金の船』に「七つの子」が発表された大正十年雅夫は数え年「二七歳」である。とても考えようもできない物語といえよう。



平成三年十月、度会郡南勢町神峠に建立された「五ヶ所湾小唄」第三節の詩碑

渡辺力編著 刻書は東道人
「野口雨情全国詩碑集大成」より

シャボン玉

二十三年前、ほろぶ出版のかたが群馬県下のある遺族を尋ね、そ

の遺品から偶然に「シャボン玉」が掲載されている雑誌が明らかとなり、仏教児童雑誌『金の塔』に大正十一年十一月発表と判明した。その雑誌は「大日本仏教コードモ会」から発行されたものである。そのことをまず踏まえておかねばならない。雨情は単に童謡・民謡を詩作した詩人ではなく、仏教童謡・民謡にも幾多の作品を遺し、また社会主義詩も存在する。「シャボン玉」が仏教児童雑誌に発表された作品であることは知られていない。「黄金虫」も『金の塔』同年七月号に発表されている。大正十三年三月『仏教童謡と童謡』に「花祭りの歌」（弘田龍太郎曲）を詩作されている。それは日本で最初の仏教行事の歌となった作品である。

さて「シャボン玉」は雨情の「愛児」が亡くなったときの歌と世上広くに流布されている。二〇〇二年五月二十七日付日本経済新聞にも、「シャボン玉」は「生まれてすぐに、こわれて消えた」。雨情は最初の子供を生後七日で亡くしている。死後「ミドリ子」と名付けた。どんな小さな命でも掛け替えがないことを私たちに教えている詩に思える」とある。

「雨情は最初の子供を生後七日で亡くしている」というが、この

「シャボン玉がこわれることなく飛んでいくように」という願いのほかに、人生に必ず挫折や意気消沈することがあるにしても、子供たちは皆すくすくと順調に成長してほしいという切実な祈りが込められている。（野口存彌著『大正児童文学―近代日本の青い窓―』（踏靑社刊）参照）

赤い靴

「赤い靴」は大正十年十二月、『小学女生』に発表した作品である。この童謡も次のような説話が世上ひろく信じられている。

『なぜか、童謡「赤い靴」のメロディーが浮かんだ。♪異人さんに連れられていっちゃった……。娘の幸せを願う母の思いを、野口雨情が詩にした悲しい歌である。モデルは静岡出身の「岩崎きみ」。

作詩のいきさつは、義理の妹が北海道新聞に投稿して明らかにになった。母親が再婚して開拓農場に入植する際、過酷な生活を心配して、三歳のきみを米国人宣教師に養子に出した。歌では「横浜のはとばから」渡航しているが、事実は異なる。きみは肺結核にかかり、やむなく預けられた孤児院で九歳という短い生涯を終えたのである。』（中日新聞二〇〇二年五月一日四

付「中日春秋」。きみは明治三十五年（一九〇二）生まれで、麻布の「永坂孤女院」で明治四十三年（一九一〇）九歳で早世したという。

「赤い靴」の発表は、きみ死去後十一年の歳月が過ぎ去っている。雨情は、それらの説話から離れたところで、〈異国情緒〉や〈憧れ〉を歌ったのである。しかも、それを裏返しにした作品、「青い眼の人形」は「赤い靴」と同年同月に『金の船』に発表した事実が存在する。雨情は『童謡と童心芸術』（大正十四年七月、同文館刊）の中で「赤い靴」の作品を掲載し、

「内容の説明」の中で次のように述べている。『この童謡は、小作「青い眼の人形」の謡と反対の気持ちで歌ったものであります。この童謡の意味は云ふまでもなく、いつも靴はいて元気良く遊んでたあの女の児は異人さんに連れられて遠い外国へ行ってしまつてから今年で数年になる。いまでは異人さんのやうにやつぱり青い眼になつてしまつたのである。赤い靴見たら異人さんに連れられて横浜のはとばから船にのつていつてしまつたあの女の児がいまはどこにどうしてあるかと考へられてならない。といふ気持ちを歌つたのであります。ここで注意を申し上げ



「ここで雨情は「青い眼の人形」の謡と反対の気持ちを歌つたもの」と明白に述べている。

ところで大岡信氏は「定本野口雨情」三巻・童謡Iの「解説」で、「赤い靴」の歌詞は、

『作者自身はどのようなモチーフで書いたにせよ、強奪される女性、買われていく女性、という極めて性的な底流するモチーフを暗示するものであつて、しかもそれが「異人さんに連れられていっちゃつた」のであるところに、より強い刺激性がひそんでいたのである。「青い眼の人形」は、いわばこの関係を逆転させ、言葉のわからない

作品の年次は大正十一年十一月である。大正七年（一九一八）秋、中里つると結婚、翌年九月四日に長女香穂子が誕生し、二人の間に穏やかな家庭を醸し出している。

雨情が、亡くなった我が児を歌い、それを全国の子供たちに唄わせるということを考えたであろうか。大正十年十二月、『童謡作法問答』（交蘭社刊）で、「先ず童謡とは芸術的の匂いの高い子供の唄であつて、それには美しい取り止めもないやうな、まだ見たこともない世界に対する限りないあこがれの心を、子供の興味にしっかりと添ふやうに、云々。」（『定本野口雨情』第七巻・童謡論・民謡論I・所収P5）と述べている。また大正十二年三月、『童謡十講』（金の星出版部刊）を出版し、その中で、

「それに童謡は唄ふものであつて決して読んで味わつたり、理智に訴へて、その善悪を判断したりするものではないのであります。」（『定本野口雨情』第七巻・童謡論・民謡論I・P一七五）という。これが雨情の童謡の詩作基盤である。家庭やわが子を取材した作品は一つもない。それが詩人・野口雨情なのである。童謡は大人の勝手な物語を創作するものではなく、単に「唄つて味あうもの」に他ならないのである。詩人・雨情は

い可憐な青い眼の人形を愛玩し保護するという形で、日本人一般に潜在している西洋崇拜コンプレックスを裏返しにみせるような構造をもつていた」とある。

まさに雨情は「女の児に対する惻隠の情がふくまれてゐる」と言及するが、惻隠は「そくいん」と読み、「いたわしく思うこと」「あわれみ」の意味であるが、「青い眼の人形」では「日本の港へついたとき／一杯涙を／うかべてた」と人形に託しながらも西洋の女の児が日本に着いたとき、同様の心理を表現されているのである。その意味からも、「赤い靴」の逆転心理を見事に詠み、ふたつの惻隠の情を重ね合わせた見事な作品といえよう。

なお、「赤い靴」も「青い眼の人形」も大正十年十一月発表であったことを忘れてはならないのである。

